

巻 頭 言

国立大学が法人化されてから、国際交流の重要性が以前にも増して協調されるようになってきました。しかし、一元的に大学当局が理念ある国際交流を統括している、いわゆる国立大学法人の国際交流のビジネスモデルに成りうる例はほとんど見あたりません。これは、法人化前の国立大学で行われてきた国際交流が、縦割りで個人の国際的人脈・活躍に立脚し、統計的数字のみを記録に残すだけの形式的な枠組みで遂行されてきたことに起因しています。このような問題点を意識しつつ、理念に基づく国際交流の構築を目指して、三重大学でも2005年10月1日に留学生センターが国際交流センターに改編されました。したがって今月号は、留学生センター紀要を引き継ぐ国際交流センター紀要の創刊号と銘打たれています。

国際交流センターは、三重大学のすべての国際的なコンテンツを一元化して計画・実行しつつ、地域との連携のもとでの国際交流にも積極的に参加していくためのセンターです。このために、センターには「国際研究部門」、「国際教育部門」、「国際サービス部門」の3つの部門を持たせています。「国際研究部門」は現在進行中の国際プロジェクトを円滑に推進するためと、新たな国際共同研究を生み出す拠点として全く新しく考案された部門です。たとえば、すでに三重大学が関わるJICAプロジェクトに対して、国際交流センターがその推進に関わっていくことが決まっていますが、その具体的なサポートシステムなどは国際交流センターが実際に動き出してから「現場合わせ」の形で構築していくことになりそうです。「国際教育部門」は基本的には留学生センターの仕事を引き継ぐこととなりますが、国際教育というキーワードから分かるように、留学生だけでなく国内学生に対しても国際感覚が身に付くような広範な教育プログラムを国際交流センターが内外に提供する事を第1の責務と想定しています。

また、国際交流センターは、三重大学・江蘇大学・チェンマイ大学が主導する3大学ジョイントセミナー・シンポジウムと、APAN国際会議のeCultureワーキンググループにも関わっています。近い将来、この紀要に日本語教育・日本語学・比較文化論・実践報告・調査報告に加え、広範で斬新な国際教育・研究に関わる論文が登場し、この紀要が「地域と共に歩むアジア・パシフィックを中心とする国際交流」を推進する駆動力の1つとなることを私は確信しています。

平成18年3月1日

亀岡孝治